

単式簿記と複式簿記の歴史と違い

井上 京亮 (21911052ki@tama.ac.jp)

井上 弥蒔斗(21911054yi@tama.ac.jp)

高島 力輝(21911213rt@tama.ac.jp)

田中 智(21911230st@tama.ac.jp)

1. はじめに

簿記とは企業において、日々の取引やお金の出入りを日々帳簿に記入、最終的に決算書を作成するための一連の作業のことをいう。家庭でつけられている家計簿にも簿記が使われている。

家計簿で使われている簿記を単式簿記という。単式簿記は1つの勘定科目に絞って記帳する方法である。日々記帳し、収入の合計から支出の合計を引けば手許の現金がいくら増減したか簡単にわかる。複雑な知識がなくても計算できる。

その一方で、一般的に企業で使われている簿記を複式簿記という。取引を複数の勘定科目で記帳する方法である。取引の結果として現金や借金がいくら減った・増えたのか簿記によってあらわすことが可能である。

2. 簿記の歴史

15c イタリアで東方貿易が栄えたころ、ヴェネツィアでは交易が盛んになったため、バンクが開発され、商人の支援を行っていた。そのため交易が盛んになり、やがて簿記の技術が生まれた。

人々はメディチ家という圧倒的存在が赤字によって倒産する事件をきっかけに簿記を学ぶことの大切さを知ることになる。

3. 研究の狙い

単式簿記と複式簿記の記帳方法の違いを理解し、実際にどのような違いが出るのかを研究する。またその結果からなぜ複式簿記が企業で使われているのかを明確にする。

4. 研究の成果

単式簿記は現在定義されていないため自分たちで定義する必要がある。一方、複式簿記は単式簿記以外の簿記のことを言う。単式簿記が定義されていないということは同時に複式簿記の定義もされていないということであり、普段私たちが使っている複式簿記も、見方次第で様々な定義できるということが、研究の成果である。